

太田 圓三（おおた えんぞう）

昌子住江

(日大・関東学院大非常勤講師)

1881年（明治14）3月、静岡県賀茂郡湯川村（現伊東市湯川）に生まれる。実弟正雄は東京帝国大学医学部教授のかたわら、木下赳太郎の筆名で詩人・評論家としても活躍した。太田は、一高を経て、1904年（明治37）7月東京帝国大学工科大学土木工学科卒業。通信省鉄道作業局に入る。1910年。

（明治43）から2年間渡欧。1919年（大正8）鉄道院工務局工事課長となり、初期の丹那トンネル工事にもかかわる。

関東大震災後の1923年（大正12）10月、帝都復興院士木局長として、復興の都市計画事業を執行する中心に抜擢された（翌年2月より官制改正のため内務省復興局土木部長）。復興事業の中心は土地区画整理であったが、その実施を最も熱心に主張し、池田宏（計画局長）等地帶収用推進派に対抗したのがかれであった。また、区画整理に反対する政友会の有力政治家達の説得にも当たっている。隅田川橋梁をはじめとする復興橋梁も、かれが心血を注いた事業の一つである。（鉄道時代、橋梁設計に業績を残している太田は、華美な装飾を排しながら、橋梁の都市美形成上の役割を重視し、弟赳太郎と協



力して画家・文学者達にも意見を求めた。橋梁の設計では、山田守等当時の若手建築家との共同作業もなされ、聖橋等にその成果が残されている。「計算できない橋を架けろ」というのが口癖だった。さらに、当時の東京の交通事情から考えて、復興事業における高速鉄道（地下鉄）の実現を切望したが、結局これは事業からはずされた。

太田の復興院入りは、十河信二（経理局長、後に国鉄総裁）の推薦による。総裁の後藤新平は、当初若いとの理由で反対したが、後には、芸術家肌の技術者として、その才能を高く評価した。なお、太田の要請により、鉄道省から多くの技術者が復興院に移った。

かれはしかし、事業の完成をみることなく1926年（大正15）3月自殺した。享年45才。遺書はない。復興局事件と呼ばれた疑獄事件の心労、激務による過労、事業遂行の重圧感などが重なったためと思われる。『帝都復興事業に就て』（1924年8月、改訂版1925年8月）と題する講演録のほか若干の雑誌論文が残されているが、本格的な著作はない。文学への関心を寄せており、玄人ほだしといわれた長唄のほか野球、囲碁、将棋、かるた、ビリヤード、謡曲と多芸多才であった。

神田橋の橋詰には、かれの死を悼んで友人知己の建立した記念碑が遺されている。